

グローバルスタディーズとは何か

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-07-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 示村, 陽一 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/873

[研究論文]

グローバルスタディーズとは何か

What is Global Studies?

示 村 陽 一

キーワード：グローバルスタディーズ、グローバル化、グローバルイシュー

はじめに…グローバル化と学問

人類社会の歴史は学問の発達史でもある。学問は人類社会の発展と共に専門分化、細分化が進んできた。特に、17世紀の科学技術革命、18世紀の産業革命という巨大な技術・社会の変化は学問分野の専門分化を急速に進めたと言える。しかし、20世紀の後半から学問、特に人文・社会科学の学問に大きな影響を与えているのはグローバル化であろう。

人文・社会科学分野においては伝統的に一国の政治・社会・経済・文化を学問分析の対象にしてきた。しかし、グローバル化の進展とともに自国中心からのいわばナショナルな学問的アプローチでは研究対象への十分な分析が困難となり、世界全体の枠組みから分析するグローバルな視点が必須になってきているとの認識が定着しつつある。例えば、歴史学の場合、従来は国家中心の歴史研究であったが、最近では国の枠を越えたトランスナショナルあるいは世界史全体の動き、いわゆる「一国歴史観」を越えたグローバルな視点からの「グローバル史観」(Global History)が1990年代以降台頭してきている。また、従来は欧米中心の歴史研究あるいは大国中心の歴史研究が趨勢であったが、このような「西洋中心史観」「大国中心史観」を批判し、非西洋世界の歴史を含む世界の巨視的な流れを視座に入れたグローバル史観が急速に影響力を増している¹⁾。

同様に、文化人類学もグローバル化とともにその研究対象が大きく変化した学問である。未開民族・文化の研究から現代都市文化を含む研究に様変わりしており、グローバル化に伴う移民、開発、環境、教育などを射程に入れた現代の諸課題を包含するようになった²⁾。

社会学もまたグローバル化の影響を大きく受けている学問であろう。社会学は近年「国際社会学」(International Sociology)「グローバル社会学」(Global Sociology)という分野が形成されつつあり、グローバル化による「国境を越えた社会現象に焦点をあてよう」³⁾としており、国民国家を前提とした社会分析の限界の認識の上に立ち、伝統的社会学が研究対象としてきた家族、階層、ジェンダー、人種・民族関係、都市化、人口変動、アイデンティティなどの社会現象を一国社会の枠を越えたトランスナショナルな分析をおこなうようになってきた。

また、日本には国文学という学問名称があるが、これは日本語による文学は日本人が書くことを前提にしている。しかし、近年は日本語を母語としない外国人が日本語で小説を書くようになり、いわば日本文学のグローバル化が起り「日本語文学」と呼ばれるようになってきており⁴⁾、これもグローバル化による変化と言えよう。

そして、グローバル化という人類史上の巨大な歴史的社会的変化を真正面から受け止めている学問がグローバルスタディーズ (Global Studies) である。次に、グローバルスタディーズの学問的特質とその教育内容を見てみよう。

I. グローバルスタディーズの研究・教育領域とその特色

グローバルスタディーズは 21 世紀に入って台頭して来た新たな学問分野であり、グローバル化という現代世界の特質・性格を反映した学問であると言えよう。1990 年代以降の冷戦構造崩壊後の世界はグローバル化の加速化という歴史的な動きを誘発し、ヒト・モノ・カネ・情報等が国境を越えて移動するのが日常化し、世界と人々が様々な分野で一体化する傾向が顕著となるボーダレス世界を誕生させた。しかし、この世界の一体化というグローバル化現象は世界と人類が直面している移民、テロ、経済格差、環境、民族・宗教紛争、ジェンダー等の諸問題を世界中の人々が共有することを意味しており、換言すればこれら人類共通の課題をグローバルな視点から探求する学問がグローバルスタディーズであると言える。

このグローバルスタディーズという学問領域はアメリカ、イギリス、オーストラリアなどの英語圏諸国の大学を中心に 1990 年代後半以降急速に発達してきている。Global という言葉は全地球的 (of or concerning the whole world) ということであり、政治・経済・社会・文化等の領域で世界全体に関係した出来事・現象を学問領域にしようという問題意識から始まったのが Global Studies である⁵⁾。

そして、このグローバル化の進展とともにグローバルイシュー (global issue) という用語が頻繁に使用されている。グローバルイシューとは、近年普及しつつある用語であり、グローバル化に伴い国境や特定の文化圏を越えた地球規模で取り組まなければならないさまざまな課題を意味し、グローバルスタディーズはグローバル化とグローバル化が生み出すグローバルイシューを探求する学問だとも言えよう。

『グローバルスタディーズ入門』(Campbell, Mackinnon and Stevens. *An Introduction to Global Studies.*) というグローバルスタディーズの教科書の構成を見ると、この学問の研究領域の範囲がある程度わかる。その内容は以下のようになっている。

1. Going Global (グローバル化とは)
2. Nation-state System (国民国家体制)
3. International Organizations (国際組織)
4. Human Rights (人権)
5. The Natural Environment (自然環境)
6. Population and Consumption (人口と消費)

7. Infectious Diseases and Globalization（感染症とグローバル化）
8. The Gendered World（性別化された世界）
9. Information and Communication Technologies（情報通信技術）
10. War and Violent Conflict（戦争と暴力紛争）
11. Peace（平和）

グローバルスタディーズという学問領域は基本的には、国際政治、国際関係論、地域研究を基盤としているが、この教科書の章立てを見るとグローバルスタディーズという学問がそれら以外の様々な学問領域を網羅していることが分かる。その意味で、グローバルスタディーズという学問は学際的でありかつ脱領域的であると言える。

カリフォルニア大学サンタバーバラ校の Global and International Studies の所長マーク・ユージェンマイヤー（Mark Juergensmeyer）によればグローバルスタディーズは以下のような5つの特色を持つ⁶⁾。

1) 地球の視座 transnational (across national boundaries)

既述したように、従来の学問は一国を対象にした分析枠組みであった。政治学、経済学、社会学、文学などの分野では日本政治、日本経済、日本社会、日本文学などのように一国を対象にした国別分析を行うのが当然視されてきた。歴史学の分野でも日本史、アメリカ史、中国史のように一国が学問対象となってきた。しかし、徐々に一国単位だけの分析では不十分であり、一国の政治・経済・社会は国家の枠を越え世界との連関の中で国境や特定の文化圏を越えた現象・傾向・問題を扱う必要があり、また現代世界・社会・文化・人間の十分な理解を獲得するために国の枠を越えた地球の視野からそれぞれの学問体系を構築しなければ困難であるとの認識が形成されるようになった。その結果、政治学、経済学、社会学などは「国際政治学」「国際経済学」「国際社会学」という名称の学問領域が台頭し、前述したように歴史の分野でも最近ではグローバルヒストリーという捉え方が一般的になりつつある。

グローバル・スタディーズは一国を分析対象とした既存の学問をグローバル化に対応させた学問と言えるであろう。

2) 学際的 interdisciplinary

グローバルスタディーズの研究者は社会科学（特に、国際関係論、政治学、経済学、社会学、文化人類学）、人文学（歴史、文学、宗教学、芸術）などの全ての分野に見出され、政治、経済、社会、文化、環境、テロ、宗教、テクノロジーなどの分野におけるグローバルな問題、いわゆるグローバルイシューは複数の学問分野の理論的枠組みや手法を駆使して分析、検証する学問と言える。

たとえば、移民・難民問題に関して、単に経済的な視点からの分析では不十分であり、テロ問題、宗教問題、民族問題あるいは国際関係などの多面的・学際的な研究分析が求められており、既存の単一的な学問的視座を超越した新たな脱領域的視点が必要となってくる。

3) 現代的でありまた歴史的である both contemporary and historical

グローバリゼーションは歴史的なプロセスなのでその歴史的な展開過程を理解する必要がある。その意味においてはグローバルイシューの現代的理解には歴史的な考察・分析が要求されている。さらに、冷戦の終了やインターネットの普及により 20 世紀の後半から 21 世紀にかけてそのプロセスが加速化されており、グローバル化の影響は現代世界に住むわれわれにとってますます身近にまた可視的になってきている。

グローバルスタディーズはグローバル化の歴史的な流れを考察するという意味において歴史的営為であり、また同時にその現代的な影響を考察するという意味において現代的営為でもある。

4) 脱植民地的かつ批判的な視座 postcolonial and critical

日本の学問も含めて、これまでの学問体系あるいは分析方法は西洋中心であるという批判が強くなってきている。従来の学問は西洋の視点から歴史・社会・文化を分析・考察しており、非西洋的な視点が著しく欠如しているという批判であり、非西洋圏の学者をはじめとして西洋圏の学者からも従来の西洋中心の学問体系を反省する声が高まっている。たとえば、グローバル化という現象でも過去においては西洋化・近代化・アメリカ化という観点でその現象を理解しようという傾向が強く、西洋化・アメリカ化している社会ほど近代化あるいはグローバル化しているという西洋中心の見方が支配的であった。この様な西洋中心の一面的な見方ではなく、非西洋的観点から歴史を含む従来の学問的視座を検証する必要があるとの指摘が強まり、この動きは「批判的グローバルスタディーズ」(critical globalization studies) と呼ばれている。

また、脱植民地的な見方というのは、西洋以外のさまざまな地域・文化圏からグローバル化という現象を分析しようという動きであり、西洋から見たグローバル化分析ではなく、グローバル化は地域によって異なった政治的・社会的・文化的影響を与えており、地域によって異なった分析・解釈が必要との指摘であり、「多種多様なグローバル化」(many globalizations) という視角の必要性を説いている。換言すれば、グローバルスタディーズは「脱植民地的」「脱西洋的」な学問的視座でもって、グローバル化という現象や人類が共通に直面しているグローバルイシューを多角的に分析する立場をとっている。

5) 地球市民の育成 aim at global citizenship

グローバルスタディーズという学問・教育では「地球市民」(global citizenship) という意識を涵養するのが大きな目的のひとつである。そして、この「地球市民」に関連するのが、「グローバルな資質・能力」(global literacy) という概念である。これは、ますますグローバル化する現代世界で学生にとって必要な資質・能力を意味しており、グローバル化する世界と多様な文化や現象を理解する能力を養うプログラムとしてグローバルスタディーズが位置づけられている。

また、このグローバルスタディーズのプログラムではグローバルイシューの解決・対応に取り組んでいる国際的機関でリーダーシップを発揮できる「グローバルリーダーシップ」(global leadership) 人材を育成するのもグローバルスタディーズの大きな目的のひとつと考えられている。

II. グローバルスタディーズの発展

1) 大学・大学院の学部・学科・研究科

グローバルスタディーズの最初の学位プログラム（BA degree program）は1995年にアメリカのカリフォルニア州立大学モンレー校（Monterey campus of California State University）で始まった⁷⁾。そして、3年後の1998年にはカリフォルニア大学サンタバーバラ校（University of California, Santa Barbara）でも学位プログラム（Global and International Studies）が誕生した。そして、その後グローバルスタディーズの学位プログラムは急速に発展し、10年以内にアメリカ、カナダ、ヨーロッパ、東アジア（日本、韓国、フィリピン、中国）、オーストラリアの大学で100以上が存在するようになった⁸⁾。北米グローバルスタディーズ学会のホームページによると、2016年9月現在カナダではウィンザー大学（University of Windsor）、ヨーク大学（York University）等5校が、そしてアメリカでは上述した2校以外にイリノイ大学、ウィスコンシン大学など14校が学位プログラムを運営している⁹⁾。

日本におけるグローバルスタディーズは、実は大学院レベルで最初に設置された。1997年に一橋大学の社会学研究科に、地域社会研究専攻（英語名称はInstitute for the Study of Global Issues）という名称で設置された。続いて、2006年に上智大学でグローバル・スタディーズ研究科（Graduate School of Global Studies）が国際関係論専攻、地域研究専攻、グローバル社会専攻の3専攻で設置された。さらに、2010年には同志社大学でグローバル・スタディーズ研究科（Graduate School of Global Studies）グローバル・スタディーズ専攻が発足した。

学部レベルでは2007年に多摩大学でグローバル・スタディーズ学部グローバル・スタディーズ学科が開設され、2013年には同志社大学でグローバル地域文化学部、仙台白百合女子大学人間学部でグローバル・スタディーズ学科が開設された。さらに、翌2014年には上智大学で総合グローバル学部総合グローバル学科、2016年には武蔵野大学でグローバル学部が開設され、さらに、2017年の4月には龍谷大学の国際学部の中にグローバルスタディーズ学科が新設される予定であり、日本においてもグローバルスタディーズ関連の学部・学科が21世紀にはいって次々と開設されている。

ヨーロッパにおいても、イギリスのロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（London School of Economics and Political Science）、ドイツのライプツィヒ大学（Leipzig University）、フライブルク大学（Freiburg University）、デンマークのロスキレ大学（Roskilde University）においても大学院のプログラムが作られるようになった。

アメリカにおける最初の大学院プログラムはカリフォルニア大学サンタバーバラ校で、その後アリゾナ州立大学、ラトガーズ大学、カリフォルニア大学バークレー校などに拡がり、東アジアでは2010年にはインドのシッキム大学（Sikkim University）、中国では上海大学が大学院プログラムを提供するようになった。また、オーストラリアでは60以上の大学が大学院プログラム（ほとんどがMAプログラム）を提供するようになった¹⁰⁾。

2) 学会・研究所

グローバルスタディーズが学問分野として確立し、学部・大学院で学科・研究科が増加するに

つれ、学会も誕生するようになった。まず、グローバルスタディーズ学会（Global Studies Association）が2000年7月にイギリスのマンチェスター・メトロポリタン大学（Manchester Metropolitan University）で最初の大会を開催、その後ほぼ毎年ヨーロッパの各大学で開催されている。

北米では、2年後の2002年5月にシカゴのロヨラ大学（Loyola University）で北米グローバルスタディーズ学会（Global Studies Association, North America）が設立された。アジアでもアジアグローバルスタディーズ学会（The Asia Association for Global Studies）が2005年に設立され、2006年に日本の関西学院大学で最初の大会が開催された。

また、大学院レベルの連携も進み、上智大学、ドイツのライプツィヒ大学、アメリカのカリフォルニア大学サンタバーバラ校、中国の上海大学、オーストラリアのロイヤルメルボルン工科大学（RMIT University）など2012年までに約50のグローバルスタディーズの大学院が参加して、コンソーシアム（Global Studies Consortium）を結成した¹¹⁾。

さらに、グローバルスタディーズの研究所も数多く設立されており、アメリカではエール大学、ミネソタ大学、ジョンホプキンス大学、インディアナ大学などが研究所を設立し、世界全体では200ほどのグローバルスタディーズ研究所が設立されている¹²⁾。

3) 研究雑誌 Journals

グローバルスタディーズが学問分野として確立された証拠として学術雑誌の刊行がある。グローバルスタディーズの最初の研究雑誌として2001年に *Global Networks: A Journal of Transnational Affairs* がグローバルスタディーズ学会の学会誌として創刊された。そして、2003年にニューキャッスル大学（University of Newcastle）から *Globalizations* が北米グローバルスタディーズ学会の学会誌として創刊され、年6回発行されている。その他にも、*The Global Studies Journal*, *The Journal of Globalization Studies* がある。また、ロシアのモスクワ大学（Moscow State University）からも *The Journal of Globalization Studies* が発行されている¹³⁾。

4) オンライン研究誌 Journals online

情報技術革命の時代を反映してオンラインジャーナルもいくつか存在していて、一番有名なのはエール大学のグローバリゼーション研究センター（Yale University's Center for the Study of Globalization）が2002年から発行している *Yale Global OnLine* で、その他イリノイ大学、ウィスコンシン大学、カリフォルニア大学サンタバーバラ校などのグローバルスタディーズ関連の研究所が共同で発行している *Global-e* やハーバード大学、MITなどが発行している *New Global Studies*、カナダで発行されている *Globalization*、またアジアグローバルスタディーズ学会が発行している *The Asia Journal of Global Studies* などがある¹⁴⁾。

おわりに

武蔵野大学グローバル学部は2011年文学部英語・英米文学科を改組したグローバル・コミュニ

ニケーション学部グローバル・コミュニケーション学科を再改組して2016年に誕生したものである。そして、グローバル・コミュニケーション学部グローバル・コミュニケーション学科時代に存在した「英語コミュニケーションコース」「日本語教師養成コース」「ビジネス英語コース」をそれぞれ学科に昇格させ、「グローバルコミュニケーション学科」「日本語コミュニケーション学科」「グローバルビジネス学科」という3学科体制として再編成した。

概観してきたように、グローバルスタディーズという研究教育領域は日本の大学、海外の大学においても国際関係論、国際政治、国際経済、地域研究をその中核として発達して来た。しかし、本学のグローバル学部は文学部英語・英米文学科がその母体だったという歴史的経緯からむしろ言語・文化・コミュニケーションに関わる領域がその学問的基盤であると言えよう。それは、本学部の大学院研究科の名称が「言語文化研究科」ということから推察出来る。

また、グローバル化に伴うグローバルイシューとは、他大学のグローバル学部と異なり、本学部にとっては、グローバル化が言語・文化・コミュニケーションあるいは個人のアイデンティティにどのような影響を与えているかを考究することを意味することになるであろう。例を上げれば、グローバル化が進展するにつれ、英語は国際共通語としての地位を確立し、日本でも英語が小学校の科目として導入され、また企業でも社内公用語として英語を導入する傾向にある。この英語の日本社会への浸透は日本の言語・文化あるいは日本人同士のコミュニケーション、さらには教育を含む日本の諸分野に歴史的な影響を与えるのは必至である。グローバルランゲージとしての英語が日本語、日本人の思考様式、コミュニケーションスタイルあるいは日本人のアイデンティティにいかなる影響を与えるのかを考察するのもグローバルスタディーズの研究対象となるであろう。

また、「グローバルビジネス学科」においても既存の経営学の知見の上に異文化コミュニケーション能力、異文化理解能力を有したビジネス人材の輩出は、文化的背景が異なる人々との接触・交渉がますます日常化する今日のグローバルビジネス社会においてその必要性が高まってきている。言語的文化的偏見や誤解が数々の悲惨な出来事を生みだしたことを歴史は証明しており、今日に至っても国際的な紛争・摩擦を生じる主要な要因となっている。

本学は今年度ブランドステートメントを「世界の幸せをカタチにする」と宣言したが、グローバル学部は「言語・文化・コミュニケーション」を中核にしたグローバルスタディーズの視座から人類・世界の幸福に貢献するような多様な視点、鋭敏な感性を持った人材を育てたいと考えている。

注

- 1) Iriye & Mazlish (ed), *The Global History Reader*. や Sachsenmaier, *Global Perspectives on Global History: Theories and approaches in a Connected World*. 入江昭『歴史家が見る現代世界』などを参照。
- 2) 例えば、Emily A. Schultz & Robert H. Lavenda, *Cultural Anthropology: A Perspective on the Human Condition*. という文化人類学の教科書の第14章では、グローバル化の影響を説明しており、グローバル化が国民国家、移民、政治、文化、人権にあたる影響を論じている。
- 3) 宮島・佐藤・小ヶ谷（編）『国際社会学』、3ページ。
- 4) 例えば、アメリカ人のリービー英雄による『星条旗の聞こえない部屋』。この作品は1992年に野間文芸

新人賞を受賞している。また、スイス人のデビッド・ソピティの『いちげんさん』はスバル文学賞を1996年に、そして2008年には中国人の楊逸（やん いー）が『時が滲む朝』で第139回芥川賞受賞を受賞している。

- 5) この global に似た言葉に international があるが、これは of or about two or more nations という意味で、二国間以上に関わる国と国との間の問題、事柄に関して使われ、全世界的な問題を必ずしも意味しているわけではない。global とは基本的にはあくまでも全世界的な事象に関して使われている。
- 6) Mark Juergensmeyer, “What is Global Studies?”.
- 7) *Encyclopedia of Global Studies*, 729 ページ。
- 8) 同上、730 ページ。
- 9) Global Studies Association North America: <http://www.net4dem.org/mayglobal> 2016年9月30日参照。
- 10) *Encyclopedia of Global Studies*, 730 ページ。
- 11) 同上、733 ページ。
- 12) 同上、735 ページ。
- 13) 同上、735 ~ 736 ページ。
- 14) 同上、736 ページ。

参考文献

- 入江昭『歴史家が見る現代世界』講談社現代新書 2014年
地域研究コンソーシアム『地域研究』編集委員会「総特集 グローバル・スタディーズ」『地域研究』Vol.4
No.1. 昭和堂 2014年
宮島喬・佐藤成基・小ヶ谷千穂（編）『国際社会学』有斐閣 2015年
Anheier, Helmut & Mark Juergensmeyer (ed.). 2012. *Encyclopedia of Global Studies*. Thousand Oaks, California: Sage.
Campbell, Patricia J, Aran Mackinnon & Christy R. Stevens. 2010. *An Introduction to Global Studies*. West Sussex, United Kingdom: Wiley-Blackwell.
Cohen, Robin and Paul Kennedy. 2013. *Global Sociology, Third Edition*. New York: New York University Press.
Iriye, A. & Mazlish, B (ed.). 2004. *The Global History Reader*. London: Routledge.
Juergensmeyer, Mark. “What is Global Studies?” *global-e*, volume5 (May 6, 2011).
Sachsenmaier, D. 2011. *Global Perspectives on Global History: Theories and Approaches in a Connected World*. Cambridge: Cambridge University Press.
Schultz, Emily A. & Robert H. Lavenda. 2011. *Cultural Anthropology: A Perspective on the Human Condition*. Oxford: Oxford University Press.
Smallman, S and Brown K. 2015. *Introduction to International and Global Studies*. Chapel Hill, North Carolina: The University of North Carolina Press.
Steger, Manfred (ed.). 2015. *The Global Studies Reader*. Oxford: Oxford University Press.

ウェブサイト

- Asian Association for Global Studies: <http://www.aags.org>
Global Studies Association: <https://globalstudiesassoc.wordpress.com/about>
Global Studies Association North America: <http://www.net4dem.org/mayglobal>
Global Studies Consortium: <http://globalstudiesconsortium.org>
New Global Studies: <https://www.degruyter.com/view/j/ngs>
Yale Global Online: <http://yaleglobal.yale.edu>